

「新収貴重書展」開催にあたって

明治大学図書館では、「明治大学図書館収書基本方針」に基づき、教育・研究に必要な資料を購入しています。そのなかには貴重書や大型コレクションなどの特別な資料も含まれ、また長年にわたって収集し、既に特色あるコレクションを形成している分野には重点的に予算を配分し、さらなるコレクションの発展・充実に努めています。古地図の一大コレクションである「蘆田文庫」、近代日本文学の初版本を集めた「日本近代文学文庫」、近世文学の洒落本、読本、草双紙類を集めた「江戸文藝文庫」などをあげることができます。これらの資料はふだんなかなか皆さんの眼に触れることはありませんが、「新収貴重書展」として、中央図書館ギャラリーで定期的に公開しています。

今回は2010年度に収蔵した資料を中心として展示します。スペースの関係で全ての資料を展示することはできませんが、貴重な資料としては、18世紀フランス啓蒙思想の成果ともいえるディドロ/ダランベール編集『百科全書』（パリ版）、ルソー『人間不平等起源論』、オウエン『ラナーク州への報告書』、コロンナ『ポリフィーロの夢』（仏訳第2版）などがあります。

また、「江戸文藝文庫」に収蔵された歌舞伎評判記『新富座俳優評判記』しんとみざやくしゃひょうばんき、黄表紙『娘敵討扇銀面』むすめかたきうちおうぎのぎんめんなど、近代文学の初版本として、泉鏡花『日本橋』、谷崎潤一郎『猫と庄造と二人のをんな』、寺山修司の第一歌集である『空には本』などを展示しています。

中央展示ケースには「蘆田文庫」より北海道の古地図『松前蝦夷地一圓圖』まつまええぞいちえんず、『懷寶江戸近郷全圖』かいほうえどきんごうぜんず、昭和初期の『京王電車沿線案内』などを展示しました。

ギャラリー奥の展示ケースには、大型本であるシャンポリオン『エジプトとヌビアの記念物』に並べて、城市郎文庫収蔵の「豆本」シリーズを展示してあります。

なお、特別展示として、現在活躍中の豆本作家5名の方に楽しい「現代創作豆本」を出展していただきました。

あわせてお楽しみいただければ幸いです。

明治大学図書館

江戸文藝文庫

1999 年、本学文学部教授、故・水野稔氏旧蔵書の一括購入を契機に創設された。江戸後期の読本・合巻・人情本・洒落本・黄表紙・滑稽本などからなり、山東京伝の『優曇華物語』初版本(文化元年)などがよく知られている。以後この旧蔵書を核として、近世後期の小説類とその関連資料を収集範囲と定め、図書館で毎年予算を計上し、コレクションの拡充を図っている。

拡充の一つの柱が元埼玉大学教授、故・大久保忠国氏旧蔵「抱谷文庫」の購入である。江戸時代の文藝および演劇関係の原本を多数蒐集していることで著名である。本学図書館では、役者評判記・番付・せりふ本などの演劇関係の資料、式亭三馬・山東京伝・山東京山・曲亭馬琴などの諸作その他を一括した草双紙類、狂言絵本類などジャンル毎にまとめて購入を続けている。

1 繪本報仇安達原 半紙本 6 冊

文亭主人(生没未詳)著・辭无斎叟(未詳)校・

石田蓼華(生年不明～文化9<1812>年没?)画

三木佐助板 刊年不明

913.56/BU1-1//H

掲出本は刊年不明本だが、初板は文化4年(1807)の刊行である。作者の文亭主人は箕山きざんとも号し、文化4年から文政7年にかけて、4作の読本をものしているだけで、ほぼ無名の作者である。画工の石田蓼華は、岡田玉山の門人で、大坂の人。名は修徳、字は子秀。石峰・玉峰・蓼華斎・蓼華・揚輝斎などを号した。師名を受けて、玉山を名乗った。本作のような絵本や読本に筆を執り、60作ほどに関わっている。

2 繪本夜船 譚 半紙本 6 冊

速水春暁斎(1767～1823)画作 河内屋岡田茂兵衛板

文化7(1810) 年刊

913.56/HA1-2//H

速水春暁斎は、名は恒信、後に恒章と称した。通称は彦三郎。家は代々呉服商で13歳で家督を継いだが、岡田玉山門下となって画工となった。文才もあって、寛政以後に自画作の読本を多数刊行している。春暁斎の読本は、多く「絵本」の名を冠するもので、おおよそ40作弱ある。中でも、『絵本忠臣蔵』2編20冊(寛政12年<1800>・文化5年<1808>)、『絵本浅草霊驗記』10冊(文化3年<1806>)、『絵本金花談』12冊(文化5年<1808>)などが知られている。

3 娘敵討扇銀面 中本 3 冊

南杣笑楚満人(1749～1807)作・

歌川豊国(1769～1825)画 和泉屋市兵衛板

寛政12(1800) 年刊

913.57/NA1-7//H

絵題簽が上中下冊とも残存しており、資料的に極めて貴重な善本である。楚満人は古いスタイルの作者だったが、その古風さゆえに、寛政改革後、黄表紙の敵討物ブームに乗って流行した。ブームの終了とともに人気も去ったが、晩年までに100作ほどをものしている。画工の豊国は知られた浮世絵師ゆえ、ここに贅言は要すまいが、草双紙(黄表紙・合巻)の画工としては、350作近くの作に筆を執っており、分量的には豊国の仕事の大半を占める。

4 封文恵方吉書始 中本 2冊 山東京山(1769～1858)作／

歌川豊国(1769～1825)画 山本平吉板 文政4(1821)年刊

913.57/SA2-18//H

山東京山は、江戸戯作の代表者・山東京伝の実弟で、作者としては二流のまま終わったが、兄とは異なり極めて長命を保った。それに比例して、作品数も膨大で200以上の作をなしている。一応、名の知れた作もないではないが、多作の二流作家をそのまま地でいった作者である。

歌川派の総帥・豊国は、多数の門人を抱えて、草双紙制作に分業的システムを作りだし、一派を率いて大量の作品を生産した。寛政から文化初頭にかけてが画業のピークで、それに取って代わった弟子の国貞(三世豊国)が、後の歌川派を率いていくことになる。

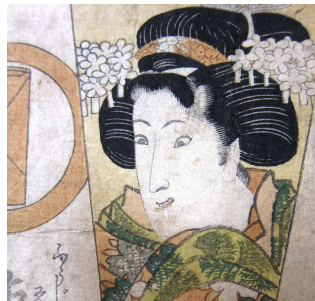
5 夏乃富士 半紙本 2冊 山東京山(1769～1858)作／

歌川国貞(1786～1865)画 森屋治平ほか板 文政10(1827)年刊

913.57/SA2-19//H

角書に「俳優素顔」というとおり、役者の日常生活を描くという趣向の役者絵本である。よく知られた本だが、原本はそれほど残っていない。先蹤作には書名も同じ『役者夏の富士』(市場通笑作・勝川春章画 安永9年序<1780>)がある。文政後半における江戸の歌舞伎役者や芝居関係者の面々が描かれており、画証資料として極めて興味深いものである。

歌川国貞の画風がマンネリ化していく時期の作であり、彼の作品としてそれほど優れたものとは言いがたいかもしれないが、多色刷りの楽しい絵本である。なお、『演劇文庫』第1編(演芸珍書刊行会 1914年)にモノクロ写真付きの翻刻が備わっている。



抱谷文庫

本学図書館所蔵の江戸文藝文庫には、抱谷文庫旧蔵の文献資料が多数所蔵されている。この抱谷文庫とは、歌舞伎・人形浄瑠璃を中心とする近世文学の研究者として知られた元埼玉大学教授、故大久保忠国氏が自身の蔵書に対して命名したもので、同氏の専門領域である江戸期の芝居や音曲関係の写本・板本を初めとし、小説・風俗書・節用集等々、広く当期の原本類を蒐集しているコレクションとして、早く同氏生前の頃から研究者たちの関心を集めていたものだった。

ちなみに、同文庫に関しては、所蔵者逝去の後に国文学研究資料館の手で悉皆調査が行われ、その後、市場に出されるという経緯を経て、その一部を本学図書館が購入するに至ったという次第なのである。

現在、本学図書館が所蔵する同文庫旧蔵書の内容は、薄物正本・役者評判記・芝居番付・草双紙その他多岐にわたるものがある。

(図書の譜 11号 P322-
原道生著より抜粋)

6 新富座俳優評判記 本編 27 冊・類書 8 冊

六二連(梅素玄魚・高須高燕ら好劇家グループ)

倉田太助・植木林之助ほか出版

明治 11~18 (1878~1885) 年刊 774.28/218//H

本書は、明治期になってから、江戸の歌舞伎評判記を再興せんとくろまれたもので、その書型・記述方法ともに江戸期のスタイルを引き継いでいる。本図書館の登録書名は内題によるものだが、同名の別書『新富座俳優評判記』も存在するので、注意が必要である。袋が号数不明分も含め、24 号分残存しているのも資料的価値がある。なお、前所有者が収集したらしく、本編以外に、類書の端本 8 冊が付属している。参考までに書名のみ掲げておく。

1 『明治十一年寅之二ノ替リ／俳優評判記』

2 『明治十二年西京道場顔見世狂言／俳優評判記』

3 『戎座卯の三月二の替り狂言／俳優評判記』

(明治十二年四月)

4 『三座役者評判記』(内題)。「明治午(十五年)秋」序。

5 『角の芝居二の替り／役者評判記』(明治十一年四月)

6 『中の芝居二の替り／役者評判記』(明治十一年五月)

7 『中の芝居けんぶつ評判』(明治十二年一月)

8 『新富座役者評判記』(明治十五年六月)



7 ディドロ/ダランベール編 『百科全書』 パリ

1751-1772 年 全 28 巻（本文 17 巻、図版 11 巻）

091.3/992//H

※当館所蔵本は、その後 1780 年までに発行された補巻 5・索引 2 を含む全 35 巻

Diderot, Denis, 1713-1784、Alembert, Jean Le Rond d', 1717-1783

L'Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société de gens de lettres
Paris, Chez Briasson, David, Le Breton, Durand, 1751-1780

ディドロ、ダランベールらが 1751 年から 1772 年まで 20 年以上もかけて編纂・刊行した全 28 巻にのぼる百科事典。ダランベールが「序文」の中で「技術と学問のあらゆる領域にわたって参照されうるような、そしてただ自分自身のためのみ自学する人々を啓蒙すると同時に他人の教育のために働く勇気を感じている人々を手引きするのにも役立つような、…」と述べているように、当時の最先端の科学・技術の知識を集大成した、18 世紀フランス啓蒙思想の成果ともいえる壮大な百科事典である。総執筆者は 184 名にのぼり、ルソーやヴォルテール、モンテスキューなども名を連ねる。編纂・執筆に協力した啓蒙思想家たちは「百科全書派」とも呼ばれた。

（序文引用：『百科全書：序論および代表項目』桑原武夫訳編、岩波文庫）

8 ルソー 『人間不平等起源論』 独語訳初版 ベルリン

1756 年 C. Friedrich Voss 刊 091.3/969//H

Rousseau, Jean-Jacques (1712-1778) *Abhandlung von dem Ursprunge der Ungleichheit unter den Menschen, und worauf sie sich grunde: ins Deutsche übersetzt mit einem Schreiben an den Herrn Magister Lessing unde einem Briefe Voltaire's an den Verfasser vermehret.* Berlin, bey Christian Friedrich Voss, 1756

ルソーの出世作である『学問芸術論』と『人間不平等起源論』とは、いずれも彼がディジョンのアカデミーに応募した懸賞論文である。『学問芸術論』は 1 等受賞、『人間不平等起源論』は入選を逃すが、『社会契約論』へと連なるルソーの社会思想を示す記念碑的著作となった。仏語初版（アムステルダム）は 1755 年刊。本書は、原著刊行の翌年ベルリンで刊行されたドイツ語訳初版。翻訳は啓蒙思想家のモーゼス・メンデルソゾーンで、

参考展示

ディドロ/ダランベール編

『百科全書』 ローザンヌ

1778-1782 年 39 巻

091.3/8//H

Encyclopédie, ou, Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers Paris, Chez la Société typographique, 1778-1781

『百科全書』は、パリ版の他に、ジュネーブ版、ルッカ版、リヴオルノ版などスイスやイタリアで数種の異本が発行された。当館所蔵のローザンヌ版の版型はフオリオ（2 折）ではなくオクタヴォ（8 折）で全 39 巻。

巻末には、この翻訳を薦めたレッシング宛のメンデルソゾーンの書簡と、ヴォルテールのルソー宛書簡の独訳が収録されている。

参考展示

ルソー『人間不平等起源論』

仏語初版 アムステルダム

1755 年 M. Michel 刊

091.3/969//H



9 コロンナ 『ポリフィーロの夢』 仏語訳第2版 パリ 1554年 091.3/990//H

Colonna, Francesco, d. 1527 *Hypnerotomachie, ou, Discours du songe de Poliphile, deduisant comme amour le combat a l'occasion de Polia. Soubz la fiction de quoy l'auteur monstrant que toutes choses terrestres ne sont que vanité, traicte de plusieurs matieres profitables, & dignes de memoire* Paris, J. Keruer, 1554

イタリア語の初版は、ヴェネツィアのアルドウス・マヌティウスによって1499年に刊行された。ポリフィーロとポリアの愛を寓意的に描いたこの作品は、美しく謎めいた挿画とともにイタ



リアルネサンスの名品として高い評価を受けている。本文各章の冒頭の飾り文字を並べると POLIAM FRATER FRANCISCVS COLVNA PERAMAVIT 「フランチェスコ・コロンナはポリア(ヒロイン)を熱愛した」という文章が隠されており、著者の名は記されていないものの、ドメニコ会修道士フランチェスコ・コロンナの作品とみなされている。日本でもこの作品のファンは多く、澁澤龍彦は「ポリュフィルス狂恋夢」(『胡桃の中の世界』1974年 青土社刊収録)の中で、その挿絵と作品について、ユングを援用しながら詳しく紹介している。本書は1554年刊の仏訳第2版だが、アルドウス版とほぼ同じ挿画が収録されている。

10 メネストリエ 『見世物論』 リヨン 1669年 091.3/991//H

Menestrier, Claude-François (1631-1705) *Traité des tournois, joustes, carrousels et autres spectacles publics* Lyon, Chez Jaques Muguet, 1669

夥しい著作をのこしたイエズス会士メネストリエはリヨンの人。ヨーロッパ近代初期に行なわれた多種多様な見世物を網羅的に示した本書は、騎馬戦、騎馬パレード、槍試合、曲芸、カドリール、山車、花火、軍隊の披露や模擬戦、さらにバレエ、仮面舞踏会にまで及んでいる。舞台装置についても一章を割いているばかりでなく、コレオグラフィーや制作に関する記述も豊富。十八世紀以降廃れていった少なからぬ見世物に関する貴重な記録である。



**11 オウエン 『ラナーク州への報告書』 グラスゴー 1821 年 092. 3/724//H**

Owen, Robert (1771-1858) *Report to the county of Lanark, of a plan for relieving public distress and removing discontent, by giving permanent, productive employment to the poor and working classes,...* Glasgow, University Press, 1821

ロバート・オウエンは、イギリスの社会改良家。1799 年、工場経営者デイルの娘婿となったことから、ニュー・ラナークの紡績工場の共同経営者となった。19 世紀の紡績工場は劣悪な労働環境にあったが、オウエンは、工場に病院を併設したり、また 10 才以下の子供の工場労働を止めさせたばかりでなく、工場内に就学前の子供のための学校を設立し、幼児教育を実践した。本書は、オウエンがラナーク州から求められて救貧税の増大の対策案として 1820 年にラナーク州議会に提出した報告書である。本書で主張された思想は、1824 年アメリカのインディアナ州に建設された共産主義的な労働者の共同体（ニュー・ハーモニー村）の建設に実験的に試みられるも失敗した。エンゲルスらから「空想的社会主義者」と評されたが、オウエンのあげた実績は高い評価を得ている。ニュー・ラナークは 2001 年に世界遺産（文化遺産）として登録された。本書は著者のサイン入り献呈本。

**12 シャンポリオン 『エジプトとヌビアの記念物』 パリ 1835-1845 年 図版巻 4 冊 092. 3/722//H**

Champollion, Jean-François, 1790-1832

Monuments de l'Égypte et de la Nubie : d'après les dessins exécutés sur les lieux sous la direction de Champollion le jeune et les descriptions autographes qu'il en a rédigées
Paris, imprimerie et librairie de Firmin Didot, 1835-1845

ロゼッタ・ストーン、ヒエログリフの解読で名高い古代エジプト学研究者シャンポリオンが、1828 年、仏・伊合同の調査団を率いてエジプトの古代建造物と碑文を調査研究した成果をまとめたもの。建造物の図像はイッポリート・ロッセーニ、文字の記録はシャンポリオンが担当した。フランス語版は 1835 年から 1845 年にかけて 6 分冊で発行されたが、当館で所蔵しているのは、そのうちの図版巻 4 冊である。当館では、すでに古代エジプト学の貴重な書物として著名な『ナポレオンのエジプト誌』（092. 3/241//H）、およびレプシウスの『エジプト・エチオピア記念碑』（099. 3/478//H）を所蔵している。



miniature book large book 豆本と大型本

てのひら 掌におさまるような小さな本のことを、日本では「豆本」と呼んでいます。豆本は江戸時代頃から多く作られるようになり、「雛本」^{ひいなぼん}「芥子本」^{けしぼん}「袖珍本」^{しゅうちんぼん}（袖に入れて持ち運びできる）などとも呼ばれました。

初期には、携帯に便利な小型化という発想から宗教書や辞書、旅行案内書などの実用的な豆本が作られましたが、やがて、愛玩用、趣味としての美しい豆本も作られるようになりました。西洋でも16世紀頃から、手書きや手作りによる持ち運びに便利な小型聖書などが多く作られています。



ドイツのグーテンベルク博物館から1958年に刊行された聖書の『主の祈り』（5.5mm×5.5mm）（展示番号19）は、もはや、豆本（miniature book）というよりマイクロブック（micro book）と呼ぶほうがふさわしいサイズです。現代の高度な印刷技術によってこのような極小な本が各国で競うように作られ、日本では、凸版印刷株式会社により1981年に製作された『主の祈り』（1.4mm×1.4mm）、また2000年に製作された『十二支』（0.95mm×0.95mm）が、世界最小の本としてギネスブックに認定されました。現在では、ロシアの『Chameleon』（0.9mm×0.9mm）が世界最小の本としてギネスブックに登録されています。



いっぽう、世界で一番大きな本といえば、British Library 所蔵の地図帳『Klencke Atlas』が有名です。これは、オランダ人商人の家系である Johannes Klencke が1660年、チャールズ2世の復位の折にイギリス王室に贈ったもので、縦178cm×横105cm、厚さ11cm、持ち運びは6人がかりという巨大な本です。

これほどではないものの、当館でも所蔵している通称「エレファント版」と呼ばれる『ナポレオンのエジプト誌』（109cm×70cm）のような大型本や、また今回「豆本」の隣に展示している『エジプトとヌビアの記念物』（73cm×55cm）（展示番号12）なども十分大きな本といえます。

このような大型本は、現代ではあまり製作されることはありませんが、かわいらしく親しみやすい小型本のほうは、ユニークな装丁や造本などに作者の個性を表現した豆本が、日本各地で刊行されており、愛書家たちの蒐集の対象ともなっています。また創作ルリクールとしての豆本づくりは、今も静かなブームを呼んでいます。



日本での豆本の流行は、1953（昭和28）年3月に創刊第1号を出した「糸ぞ・まめほん」に始まります。その後全国各地で「豊前豆本」、「名古屋豆本」など地方名を冠した郷土色豊かな豆本シリーズが誕生しました。東京・神田神保町の古書通信社が発行する「こつう豆本」は昭和45年5月から平成14年1月までの間に141種が刊行されています。



本展示では、「地方豆本シリーズ」5種、「こつう豆本シリーズ」、『主の祈り』（いずれも「城市郎文庫」収蔵）とともに、現在活躍中の豆本作家5名による楽しい創作豆本を展示いたします。



現代の創作豆本一作家と作品紹介

■紅梅堂／田中栞■

日本豆本協会会長、日本出版学会理事、東京製本倶楽部会員。横浜在住。壊れにくい豆本づくりを目指し、無線綴じではなく本文折丁を糸で綴じる製本方法を中心に豆本教室を開催している。

『田中栞蔵書票作品集』

折本、消しゴム版多色刷りで制作した豆本用の蔵書票を10点貼込んだ。
(展示番号20)

『豆和綴じ帳』

線装本、2冊。本文紙の罫線は、消しゴム版画で彫って刷ったもの。
(展示番号21)

■小さな本工房／嶋原利夫■

古今東西の名作を豆本として刊行し続ける豆本作家。千葉市在住。本文折丁を「リンクステッチ」という技法で糸綴じし、きちんと開く書物制作を心がけている。

『対訳小倉百人一首』

14種。英訳、独訳、仏訳、韓訳など様々な言語で小倉百人一首を楽しめる、豆本シリーズ。(展示番号22)

『Under the Mistletoe』

『Christmas Roses』

『Fairy's Album』

『The Language of Flowers』

『Gems from Mother Goose』

ヴィクトリア時代の美しいアンティーク絵本をそのまま豆本に。(展示番号23)

■本のアトリエ AMU／中尾あむ■

ルリユール（書物工芸作品を制作する手製本）を手がける製本家、京都市在住。製本家中尾エイコさんの長女。

『きものの着付け』

きものを着ていく様子が「パラパラ漫画」で展開する楽しい一冊。本の前小口は、パラパラしやすいよう斜めにずらしてある。表紙や函に使った布も、着物の生地。(展示番号30)

■花霞堂／nanakikae■

古びた時代の書物の形にこだわって創作する豆本作家。広島市在住、修士1年。

『図書館棟春夏秋冬』

図書館を舞台にした小説を、それぞれ図書館カード袋に収めている。図書館蔵書形のパッケージや禁帯出シールなどもすべて自作。(展示番号24)

『絶佳』

豆卷子本を小さながま口に収めた。
(展示番号25)

『二十四花嵐の国＊乱』

円形の折本。(展示番号26)

■本のアトリエEIKO／中尾エイコ■

ルリユール（書物工芸作品を制作する手製本）を手がける製本家、大阪市在住。エストニア芸術製本コンクール「金の本賞」受賞、フランス国際芸術製本ビエンナーレなどでも受賞多数。

『あむちゃんの詩』

夫婦函入り。長女にあむさんが幼い頃に発した珠玉の言葉を、母であるエイコさんが書き留め、豆本として仕立てた名作。
(展示番号27)

『手製本の世界 1981-2010』

折本。ルリユール作品の軌跡をまとめた豆本。裏面は、オリジナル・マーブル紙をモチーフに印刷。(展示番号28)

『ルリユール豆ノート』

総革表紙には金箔や革モザイクの装飾を施し、花布も手編みした本格造本。オリジナル・マーブル紙をあしらった貼函入り。
(展示番号29)

日本の地方豆本シリーズ

13 「豊前豆本」

1972 年創刊。1987 年終刊。限定本コレクターとしても知られる北九州の教員であった岡田始氏が版元。貼りこみの図版や凝った表紙の装丁など、手づくり感あふれるユニークなものが多い。限定 200 部、100 部、50 部などがある。



14 「名古屋豆本」

1967 年創刊。名古屋タイムズの社長でもあり、作家、画家、ジャーナリストでもある亀山巖氏が版元。限定 300 部。郷土史から趣味的なものまで内容は多岐にわたる。

15 「静岡豆本」

1956 年創刊。現代豆本館長で医師でもある小笠原淳氏が版元。
第 8 集 『筐底秘稿』 1960. 12

16 「山陰豆本」

1954 年創刊。高木光三氏が版画家の板裕生氏の協力を得て刊行したもの。
第 1 集 『馬玩特輯』 1954. 12
第 2 集 『月の輪神事』 1956. 1

17 「肥後豆本」

1976 年創刊。
熊本市 もぐら書房発行。
1 『蝗日記』 蒲池正紀著 1976. 8
2 『北原政吉詩集 酋長シバの歌』 1977. 1
4 『本田晴光詩集 時刻表』 1977. 8

18 「こつう豆本」

東京神田の古書通信社から、大阪万博の 1970（昭和 45）年を機に刊行が始まった。終刊した平成 14 年までに 141 種を刊行。

参考文献：今井田勲『私の稀観本』

ドイツの極小豆本

19 『主の祈り』 マインツ ゲーテンベルク博物館 1958 年 (5.5mm×5.5mm)

The Lord's prayer Mainz : Gutenberg-Museum, 1958. [16] p. ; 5.5×5.5 mm.

「主の祈り」を英語、フランス語など 7 ヶ国語に訳した作品。文字の大きさは約 0.17 ミリで、1 頁に約 300 文字が印刷されている。



日本近代文学文庫

小林秀穂元予科長の寄贈書（文学、哲学書 100 冊）をもとに、昭和 22 年(1947)に「小林文庫」として設置。日本文学の授業で薰り高い文学書初版本を学生に触れさせたいとの考えからであったと伝えられる。1991 年に故佐藤正彰元図書館長・文学部教授の旧蔵書を受け入れるにあたって現名に改称した。

コレクションは明治から昭和戦前期までの文学書の初版本を中心とし、最近では文学史上重要な作家の戦後の作品を加えている。また、本学関係者の作品およびその人となりを伝える自筆もの(署名本、草稿、書幅等)もコレクションとしている。

31 大橋新太郎編 『タすずみ』 明治 27(1894)年 博文館 MB200/57//W

山田美妙「光源氏寢覚睦言」、松居松葉「落日観」、遅塚麗水「万年碑」、武田仰天「命とり」、川上眉山「有明」の 5 編を載せる。巻頭の「光源氏」は、時代背景を室町期に設定し、足利義政の愛妾、藤の方と足利光氏の不義の恋を描く。作者山田美妙は、言文一致の文体で名を高めたが、この作品は夜会で余興に演じさせた寸劇の脚本で、素人でも演じられると薦めている。出版元博文館の広告文は、5 作品は避暑納涼のための傑作で、本書をひもとけば酷暑を忘れ楽しみは極まると絶賛している。

32 永井荷風(1879-1959) 『歡樂』 大正 3(1914)年 和田甚衛(俳書堂) MB100/NA1-28//W

永井荷風は、明治 12 年(1879) 生、昭和 34 年(1959) 没。東京外語大中国語科中退、のち慶応大学教授。本書は、「人は幾度も恋する事が出来るだらうか。唯た一度しか出来ない」と、女性は必ず云ひ張るに違ひない。」ではじまる。四十代で小説の大家となった「先生」が語る恋の体験談を綴り、「先生」が愛誦する詩の一節「余す処なく歡びを味わひ、余す処なく痛苦をなめよ」を引用して終わる。荷風は、享樂主義的な作品を数多く遺し、昭和 27 年(1952) に文化勲章を受章した。

33 泉鏡太郎(1873-1939) 『日本橋』 明治 43(1914)年 千章館 MB100/IZ1-28//W

大正ロマンが凝縮されているこの本だが、日本画家である小村雪岱と初めてコンビを組んだ本である。以来、雪岱は泉鏡花作品に 20 冊以上の装幀を手がけているが、雪岱の雅号は鏡花より受けたもので、鏡花と雪岱の親交は一生続いた。鏡花の華麗で視覚的な独特の文体は、当代を代表する画家を魅了し、そうした画家たちにより贅^{ぜい}を尽くした装幀がなされた鏡花の著書は「鏡花本」と呼ばれ、美術作品としても高い評価を得ている。

34 堀口大學（1892-1981）『月光とピエロ：詩集』

大正 8（1919）年 自費出版 靱山書店（発売）四六判 216 頁

1 圓 70 銭 グラシンカバー付 天金 地小口アンカット

フランス装 装幀：長谷川潔 表紙画・木版彫刻：菊池武嗣

MB100/H05-26//W

第一訳詩集『昨日の花』（大正 9 年〈1918〉）、詩 12 章 79 篇を収録している。カバー代わりに書名を文字印刷したグラシンカバーが掛けられており、木版画のカットが透けて見える。本書と同時に詩集『パンの笛』を同じ靱山書店より発行し、いずれも長谷川潔が装幀を担当した。

外交官の父に従って十数年間の海外生活を送り、ヴェルレーヌ、グールモンなど象徴詩人の影響を受けた。和文脈にフランス語の響きを取り入れた明るく優雅な詩風は、詩壇に新鮮な衝撃を与えた。

35 佐藤春夫（1892-1964）『繪本 FOU』 昭和 11（1936）年 版画荘

谷中安規装畫

MB100/SA26-59//W

谷中安規は、木版の素朴な持ち味をいかした自刻自摺による創作版画（浮世絵のような分業ではなく、図案や彫り・摺りなどほとんどの工程を自分で行う）を制作した。佐藤はその才能を認め、安規に挿し絵を依頼した自らの本の序文で、「もし、この本が後世に残るなら、それは安規の絵のためであろう」と称賛している。本書のはしがきにも、「谷中は僕のカンナ屑を化して花びらにし、僕の小石を拾ってパンにした。つれ弾きと唄と合わなくても構うことではない。ふたりとも自ら満足している酔漢だからである。」と記している。

36 谷崎潤一郎（1886-1965）『猫と庄造と二人のをんな』

昭和 12（1937）年 7 月 創元社刊 函付 2 円 50 銭 装

釘挿畫：安井曾太郎

MB100/TA30-40//W

雑誌『改造』昭和 11 年 1 月と 7 月に連載された長編小説。猫を溺愛する男と、男の心を自分に向けようと躍起になる二人の女の、猫一匹に翻弄されるさまがユーモアたっぷりに描かれている。著者は関東大震災を機に関西へ移住して以来、その風土と文化から日本的な伝統美に目覚めてゆく。それまでは耽美主義、悪魔主義などと評されていた作風にも大きな影響が及び、古典への回帰を遂げるに至った。本作品にも関西方言が巧みに織り込まれており、全体になめらかなリズムを持たせている。本書は限定千二百部のうち第四号。著者より武者小路実篤に宛てた献呈署名入り。

37 寺山修司（1935-1983） 『われに五月を：寺山修司作品集』

昭和 32（1957）年 作品社 装幀：鈴木悦郎 MB100/TE8-1//W

寺山修司の第一作品集。詩、短歌、俳句、日記で構成されている。全て 10 代のときに作った作品で、俳句は高校時代の作品である。短歌は昭和 29 年第 2 回『短歌研究』新人賞特選を受賞した『チェホフ祭』50 首より多数が収められている。当時ネフローゼを患い生死の境を彷徨っていた著者の姿を見た『短歌研究』編集長の中井英夫が、稀有な才能を残すべく出版社に働きかけて刊行された。

後書き「僕のノオト」の中で、著者は「この作品集に収められた作品たちは全て僕の内に棲む僕の青年の所産である。言葉を更えて言えばこの作品集を発行すると同時に僕の内で死んだ一人の青年の吊いの花束とも言っていていいだろう。」と述べている。

38 寺山修司（1935-1983） 『空には本：寺山修司歌集』

昭和 33（1958）年 的場書房 装幀：岸田衿子

挿絵：野中ユリ

MB100/TE8-2//W

寺山修司の第一歌集。本学所蔵本は著者署名入りの貴重な 1 冊である。見返しには「そらのうた」と「季節が僕を連れ去ったあとに」の楽譜、口絵には病床で撮影したと思われる著者の写真がある。第一作品集『われに五月を』に収められている短歌の大半を収録し、さらにその後の入院療養中に書かれた作品をあわせて構成されている。本歌集により、塚本邦雄と並ぶ前衛歌人として不動の地位を確立した。

39 江戸川乱歩（1894-1965） 『屋根裏の散歩者』

昭和 34（1959）年 4 月 真珠社刊 豆本 原版嵌入箱入り

絵：池田満寿夫

MB100/ED1-1//W

月刊誌『新青年』の大正 14 年 8 月増刊に発表された初期の短編小説。自宅押入れの天井板を外し、屋根裏へ登ったという著者の体験をもとに書かれている。屋根裏の風景、主人公が天井の節穴から覗き見たさまざまな人間模様が生き活きと描写されている一方、著者自身による作品解説においては、肝心の殺人手段、犯罪発覚の論理性についての筋書きが二の次となった旨が述べられている。しかし、その着想の奇抜さから同年翌月発表の「人間椅子」などとともに好評を博していることから、日本本格推理小説の礎を築いた作品といえよう。本書は限定 200 部のうち第 111 番本で、池田満寿夫によるオリジナル銅版画挿絵 10 葉を収める。

40「半仙戯」石川道雄編 昭和8（1933）年5月—昭和9年7月

半仙戯社 全7冊

MB300/37//W

ドイツ・ロマン派のホフマンの翻訳などで知られる独文学者・詩人の石川道雄主宰の同人誌。昭和8年5月に創刊され、同9年7月で終刊。寄稿者には中原中也、高森文夫、燕石猷（岸野知雄）らがあり、谷中安規の自摺版画が全号の扉を飾っている。半仙戯とは、「ぶらんこ」のことで、唐の玄宗が官女に鞦韆（ぶらんこ）の遊戯をさせ、その楽しむさまを見て、これを“半ば仙人になるような気がする”と述べたという故事に由来する。石川道雄は、後に同名の詩集『半仙戯』（1954年、同学社）を上梓している。

蘆田文庫

歴史地理学者として高名な^{あしだこれと}蘆田伊人が生涯をかけて収集した約 2,000 点の古地図のコレクションを 1957 年に購入。内容は、世界図、北方図、日本図、地方図、町図、街道図、水路図、俯瞰図、など幅広い分野に渡っている。日本図では、江戸初期の行基図や国絵図、元禄期の石川流宣『本朝図鑑綱目』、江戸中期に民間図の主流をなした安永 8 年(1779)版の長久保赤水『日本輿地路程全図』、伊能図、明治期の地形図などが系統的に集められており、日本地図成立史を知る上でも有用なコレクションと言える。また、地方図には、当該地域において既に失われてしまった貴重なものが含まれている。世界図では、大黒屋光太夫将来の両半球図写図や、リッチ系の楕円形図などが所蔵されている。

41『松前蝦夷地一圓圖；蝦夷地畧圖(書題簽)』 文政～天保年間写 1 舗 105.5×103.0cm
AS10/65//H

東西に短縮した北海道本土の形、実際からは 90 度回転して東西向きになったカラフト島、千島列島の描き方などから、加藤肩吾作製蝦夷地図の系統と考えられる。原図は、寛政年間に行われた松前藩の蝦夷地調査を反映したものと推定されている。加藤肩吾は松前藩の侍医。寛政 4 年(1792)の漂流民大黒屋幸大夫らを伴ったロシア使節ラクスマン、寛政 8 年(1796)のイギリス人ブロートンの蝦夷来航時にその応対役を務めた人物である。

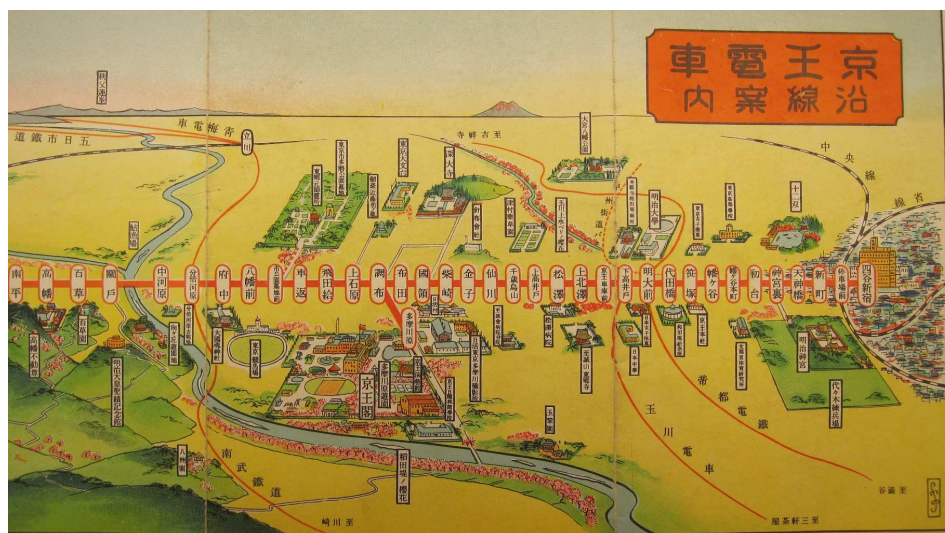
42『懷寶江戸近郷全圖』 九皋堂藏 江戸後期 木版 1 舗 58.3×72.3cm AS36/315//H

東は船橋、松戸、西は日野、北は大宮、岩槻あたりまでを描く。標題のごとく懷に入れて持ち歩くために、小さく折り畳まれている(18.2×7.4cm)。各地の花、鳥などの見頃を示した表が地図下段に記載されている。行楽地図として使われたものであろう。



43『京王電車沿線案内』 京王電氣軌道株式會社 石版 1枚 13.1×37.0cm AS36/311/H

京王線を南側から俯瞰した沿線案内図。新宿から、「停車場前」「新町」「天神橋」「神宮裏」等、慣れない駅名が並んでいる。1935年に改称した明大前駅（松原駅）と1937年に改称する京王車庫前駅（桜上水駅）が両方とも記載されているので、この間の出版と考えられる。裏面に「沿線名所案内」「京王ハイキングコース」「旅客運賃表」等を記載。



44『京王電車沿線案内；四谷新宿京王電車』 石版 1枚 15.2×36.6cm AS36/311/H

京王線を北側から俯瞰した沿線案内図。明大前駅と改称する前の松原駅が記載されていることから、改称された1935年より前の刊行で、もう一枚の「沿線案内図」よりも古いものである。「天神橋」「新町」「京王車庫前」等の駅は図面上省略されているものと思われる。裏面に「京王電車沿線大観」「沿線名所史蹟案内」「御陵参拝高尾探勝特別割引案内」等を記載。





第 43 回 明治大学中央図書館企画展示
新収貴重書展

編集・解題執筆：中央図書館ギャラリー企画運営 WG

（伊能秀明、鈴木秀子、宮澤順子、吉田千草、仲山加奈子、永田由香利、西村礼子）

解題執筆協力：展示番号 1-6[江戸文藝文庫] 内村和至（文学部教授）

展示番号 41-44[蘆田文庫] 菊池亮一（図書館総務事務室）

発行：明治大学図書館

発行日：2012 年 3 月 24 日